

森林・木造現場教育「木匠塾」の実践と運営手法

-建築・環境系専攻の大学生と地域に与えた影響-

戸田都生男（財団法人啓明社/特別研究員・木匠塾/事務局長）

キーワード：都市と農山村、体験教育、森林・木造文化、大学

1. 研究の背景と目的

昨今、NPO や行政による森林や農山村地域での自然保護やものづくり、まちづくりの実践が活発である。森林ボランティア活動団体は2000年の統計上約580団体あり、把握されていない数を含めるとさらに存在する。^{*1}無報酬でメンバーの入替りが多い素人集団になりがちな森林ボランティアでは森を救えないという指摘もあるように、^{*1}森林、山村や参加者に効果的であるのだろうか。一方で、住宅業界でも2000年以降、「近くの山の木で家を建てよう」宣言を始めとする国産材を活用した木造住宅普及啓蒙活動^{*2}が日本各地で顕著になった。

当研究では森林と建築の問題解決を農山村で木によるものづくりの中で実践してきた木匠塾の活動の経緯と展開を振り返り、地域や森林ボランティア、ものづくり団体等の将来の住まい・地域づくりを担う人々に還元することを目的としている。森林・木造の現場教育は広範囲の分野にわたる環境教育や持続可能といったテーマを可視化する一助となるのではなかろうか。

2. 研究の方法

主に各年の参加者人数、開催地である村の人口推移及び活動プログラム、村行事と歴史等並びに参加者の感想文、アンケート及び行政関係者、住民へのヒアリング、さらに物理的統計データだけでなく、10年間に及ぶ参加学生の声と制作物の変遷を含めて関係者がどのように木匠塾を考え実施してきたかを検証し、活動の意義を明らかにした。尚、当研究では次項に述べる各地の木匠塾の内、主に関西地区（奈良県川上村）の

木匠塾に関して検証を行った。

3. 実践対象の概要「木匠塾」とは何か

木匠塾の発端は1991年に岐阜県高根村で芝浦工業大学、千葉大学、東洋大学の合同ゼミ合宿である。主に建築系大学の授業カリキュラムにおいて木造建築教育がほぼなされていなかったことから、木材産地である林業の現場で学ぶことを目的として毎夏、開始されている木を通じての建築塾である。^{*3}^{*4}1995年には岐阜県加子母村、1998年からは秋田県角館町、奈良県吉野郡川上村、1999年京都府美山町、2000年山形県村山市五十沢、2003年滋賀県多賀町、京都府京北町、2004年新潟県佐渡市と年を重ねる毎に参加学生も増加し日本の農山村を主とする各地へ活動拠点が広がった。さらに今年からは兵庫県六甲山で開催し農山村から消費者の多い都市部への展開を図っている。

各地で活動内容と運営方法も多少の差異はあるが、地域の特性を踏まえた上で地元の樹木を活用して、地域に残し役立つものを創るという点と、大学・地域の行政・住民各者の連携といった点で共通した活動である。学生たちは学内での建築模型制作レベルに対し、木匠塾での1/1の実寸大でのスケール感の得られるものづくりと地域の人々に魅力を感じて集まってくるのである。

<参考文献>

^{*1} 田中淳夫：日本の森はなぜ危機なのか、平凡社、2002.3.

^{*2} 小池一三、三澤文字他：木の家に住むことを勉強する本、（社）農山漁村文化協会、2001.1

^{*3} 布野修司 他：群居47号、特集「木匠塾」、群居刊行委員会、1999.3

^{*4} 嵩和雄：大学教育と山村地域との関わりについて（その1）木匠塾の活動について、日本建築学会大会学術講演概要集（中国）13002、（社）日本建築学会、1999.9